

あんげろす

ウクライナの人々に思いをよせて

加山 久夫

2月24日以来、ウクライナの大惨状に心を痛み、いたたまれない日々が続いています。まさか21世紀にこのような野蛮な他国侵略と人々へのむき出しの攻撃が現実のこととなるとは。しかし、考えて見れば、すでにイラク、シリア、アフガニスタンなど多くの国々で無数の人々が同様の苦しみを強いられてきており、改めて人類社会の無力さや愚かさを思わざるをえません。しかし、この度のロシアによるウクライナ侵攻は核戦争による世界大戦に発展する可能性がリアルなものになっているだけに、実に深刻です。これは何としても食い止めなければなりません。1962年、キューバ危機が起こり、あわや核戦争が勃発するのではと大きな危機感を抱いたことを想起します。あの時は、危機一髪のところで、事なきをえました。しかし、ウクライナ危機はすでに軍事進攻が実行され、ロシア軍による罪なき市民たちへの無差別攻撃がくりひろげられています。恐ろしいことに、点在する原子力発電所をも攻撃対象にしています。そして、なによりも心配なことに、ウラジーミル・プーチンという特異な性格と思想をもつ指導者の手に核のボタンが委ねられています。ヒロシマ、ナガサキ、フクシマを経験した日本には、なんとしても核戦争を抑止するために声を大にしてゆく使命が与えられています。

こうして一日一日が過ぎてゆくなかで、時々刻々、ウクライナの人々は命の危険にさらされており、400万人を越える人々が国外に避難しています。そのなかにはロシアに拉致された人々も多くいるということです。私たちはウクライナの人々に思いをよせ、連帯しつづけたい。そして、その連帯の輪のなかには、ロシアの心ある人々もいることも忘れないようにしたいと思います。

かやま・ひさお（名誉所員）

第87号

2022年4月



自己紹介

國津 信一

初めまして。私は 2021 年に協力研究員として、研究所に加えて頂きました。私は日本基督教団の牧師なので、牧会のこれまでを記して、自己紹介に代えさせていただこうと思います。

2001 年春に神学校を卒業し、日本基督教団の牧師として三重県伊賀市にある上野教会に赴任しました。三重・和歌山で活躍した女性宣教師ミセスドリナンが建てた教会で、私の着任当時で 120 年の歴史を持っていました。伊賀と言えば忍者発祥の地であり、教会の裏にある忍者博物館では手裏剣ショーが毎日開催されていました。また松尾芭蕉の生誕地として有名でした。芭蕉は忍者として、日本全国を旅したという説も確かに頷けるものでした。伊賀の古い街並みを歩いていると、今も忍者が隠れて活動しているのではと感じたものです。私の育った関東とは全く違う文化での生活は、本当に良い体験でした。

その後、宮城県仙台市の教会へ転任しました。すると仙台市から道路拡張に伴う会堂移転の要請があったため建築に踏み出し、新会堂が建ちました。2011 年 3 月の東日本大震災の折、その会堂は頑丈でひび一つ入らなかったため、近隣の方たちの避難所となりました。夏前に避難者全員が帰宅された時、張りつめていた糸が切れ、強い虚無感に襲われました。津波によってごっそりとえぐられてしまった仙台・福島海岸線の静けさに通じるような感覚でした。

丁度その頃、ドイツのプロテスタント教会から支援献金の申し出を頂き、休養を兼ねて初めてドイツを旅行しました。その際訪れたのがヴィッテンベルク。マルティン・ルターが 1517 年に宗教改革を起こした町でした。95 か条の提題を貼り付けた城門の前に立つと、私自身の内側にある思いや力を越えた外側からの確かな力を感じ、震災による虚無感から不思議と癒されました。その後、

門の近くにあるルターが家族と生活した家に入ってみると、彼が着用していたガウンが展示されていて、そこからルターの息づかいが伝わってくるようでした。

帰国後、ヴィッテンベルクで感じたあの力について学びたいという思いが膨らみました。そのためドイツへ渡り、トリア（中世には第二のローマと呼ばれドイツ有数のカトリックの町）での生活が始まりました。そこには数少ないプロテスタント教会があり、私は Kirchengemeinde Trier（トリア教会）のメンバーに加えて頂きました。その教会の牧師さんたちや役員の方たち、そして音楽監督に本当に良くして頂き、教会の中の二つの聖歌隊にも加わりました。一つは、カスパー・オレヴィアン聖歌隊と言い、トリア出身の宗教改革者オレヴィアンの名を冠しています。彼はカルヴァンの下で福音主義神学を学び、ハイデルベルク信仰問答を記しました。もう一つは、トリアー・バッハ聖歌隊です。この聖歌隊で、バッハが活動したライプツィヒに演奏旅行に出かけました。宗教改革 500 周年の時には、聖歌隊のメンバーとしてお祝いに参加することができました。

この町には大学があり、その中にラインラント教区（ドイツプロテスタント教会の中の一教区であり、本部はデュッセルドルフに置かれています）が開設したエキュメニカル研究所があります。私はその所長である指導教授の元、歴史学科博士課程の学生として、日本で働いたドイツ人宣教師の働きについての研究を始めました。すると、あの初めてのドイツ旅行の際、ヴィッテンベルクの城門で感じたあの目に見えない力が、ドイツ人宣教師の働きや生き様からも感じられることに気付き、その力が連綿と受け継がれていることを知りました。現在も、私は研究を通してそれに関わることができ、幸いです。

日本帰国後に大学の非常勤講師に迎えて頂き、更にキリスト教研究所にも加えて頂きました。明治学院の先生方のこれまでの温かいお支えに感謝しています。この研究所で皆様のご指導とお交わりを頂きながら、研究を深

めていけたらと願っています。どうぞこれからも宜しく
お願い致します。

くにつ・しんいち（協力研究員）



ヴィッテンベルク城教会の扉

（ドイツ大使館 Twitter より引用）

<https://twitter.com/GermanyInJapan/status/925165619682607104/photo/2>

日露交流のはてに

加藤 拓未

2022年2月24日、ロシアがウクライナへ侵攻した。
この「侵攻」は、ウクライナ支持側からは「侵略」と呼ばれ、ロシア側は「特別軍事作戦」と呼んでいる。国が変われば、立場が変わるのも当然だが、いずれにせよ実態は「戦争」であり、現場は凄惨さを極めている。我が国は、ウクライナ支持を表明しており、私もテレビや新聞、インターネットなどで得た情報から、ロシアの軍事行動には、けっして賛同はできない。今回のロシアの行動は「侵略」であり、許されざるものである。

こうした断固たる思いをもつ一方で、私は2019年6月にモスクワを訪問し、当地のルーテル大聖堂で、何人かのロシア人たちと知り合った。彼らは今回の事態を、どのように受け止めているのだろうか？ 聖職を目指し、

牧師見習いとして神学に励んでいたヴラッド君は、倒れゆくウクライナの民間人に対し、何を思うのだろうか？ 美術や舞台芸術が大好きな大聖堂オルガニストのエレーナさんは、自国の軍隊が行っている非人道的な行為に対し、はたして冷静でいられるのだろうか？ ウクライナ関連の報道が聞こえてくるたびに、彼らの顔が浮かぶ。そう。なまじモスクワに行ってしまったために、情が湧いてしまい、私はロシアをシンプルに日本の「制裁対象国」として割り切って見るができないのである。

■モスクワ演奏旅行の実現

そもそも、なぜモスクワに行ったのかと言うと、日本の外務省は今から4年前の2018～19年度を「ロシアにおける日本年及び日本におけるロシア年」と称し、日露相互のあらゆる分野における「友好」および「相互理解」の促進を強化する年として位置付けた。ロシアはまごうことなき隣国だが、近くて遠い国でもある。とりわけ米ソ冷戦時代を覚えている世代にとっては、むしろ「敵国」というイメージの方が近いくらいだ。私も十代の多感な時期が、冷戦時代の最後の10年と重なったため、正直なところ、旧ソ連は何をするかわからない「危険な国」という悪いイメージしかなかった。

しかし、今の「ロシア」は、かつての「旧ソ連」ではない。また、年齢を重ねた現在、いつまでも高校時代の青い感覚に縛られているのもどうかと思うようになり、それならば、この日露友好強化年に、なにかしら「私なりの貢献をしてみたい」と思うに至ったのである。そこで、レギュラー出演させてもらっているNHK-FMのラジオ番組「古楽の楽しみ」で、2019年3月に「17～18世紀のロシア音楽」と題する特集を組んでみた。ロシアの古い音楽を紹介することで、バロック音楽好きのリスナーたちがロシアに好意的な興味をもつきっかけになればと思ったのだ。意外性のあるテーマが良かったようで、放送当時はなかなか好評だった。ただ、私のような一介の研究者ができることは、この程度が精一杯かと思ってい

たら、意外にもさらに直接的に日露友好に貢献できる機会が訪れることになる。実は、日露青年交流センターの交流プログラムの一環として、2019年6月7～15日のスケジュールで、モスクワへ演奏旅行に行くことになってしまったのである。

演奏曲は、日本最初
のオラトリオ作品、安
部正義のオラトリオ
《ヨブ》を持ってゆく
ことにした。安部正義
は、戦前、明治学院の
教授だった人物で、彼
のオラトリオ《ヨブ》
は『ヨブ記』を題材に

している。ロシアはキリスト教の国であるから、キリスト教音楽であれば、歌詞の意味がわからなくても受け入れやすいのではないかと思い、この曲を選んだのである。本来であれば、伴奏にオーケストラが必要となるが、過去の演奏例を参考にし、今回はパイプオルガンによる伴奏で演奏を行うことにした。

演奏会場に関しては、やはり宗教曲を演奏する以上、教会がふさわしいかと思ったが、ロシア正教会は、礼拝時に楽器演奏を禁じる教派であるため、肝心のパイプオルガンがない。では、ロシアで「パイプオルガンがある教会はどこか？」と考えたところ、それは礼拝で賛美歌を必ず歌う「ルーテル教会（ルター派教会）」であれば、あるのではないかと考えた。ただし、ソ連時代の無宗教政策を経た現在のロシアに「はたしてルーテル教会が存在するのだろうか？」という一抹の不安も思い浮かび、それを抱えながらも探してみると、実は少数派ながら健在していたことがわかった。そこでいくつか引受先をお願いをしてみると、ロシア・ルーテル教会の総本山であるモスクワ・ルーテル大聖堂（聖ペトリ・パウリ教会）から「来なさい」と二つ返事が来てしまった。「来い」と言われた以上は、もう行くしかない。



オラトリオ《ヨブ》
モスクワ公演ポスター

今回は「青年交流プログラム」の一環であるため、参加者は「40歳以下」が原則（団長を除く）となっている。そこで、国立音楽大学や東京芸術大学の声楽科の学生たちや、若手の声楽家に声をかけたところ、



モスクワ・ルーテル大聖堂

あつという間に25名が集まり、演奏旅行は一気に本格化した。ロシアは、言わずと知れた芸術大国であり、オペラやピアノ、オーケストラ、バレエなどは世界最高の水準にある。冷戦時代の記憶におびえる筆者をしり目に、若者たちの嗅覚は、そうした芸術の匂いを敏感に察知したというわけだ。現代の「若きボヘミアン」たちも、なかなか捨てたものではない。

こうして条件がそろった結果、日露青年交流センターの後押しを受けられることになり、期待と不安が入り乱れるなか2019年6月7日の午後3時、ついに私は若者たちとともにモスクワの地に降りた。

■交流の日々とオラトリオ《ヨブ》

それからは、夢のような1週間であった。モスクワ・ルーテル大聖堂にやってきた日本人グループは、われわれが初めてとのことで、大聖堂側では私たちを手厚く歓待し、牧師見習いのヴラッド君と教会第2オルガニストのエレーナさんが担当者となって、到着翌日からさまざまな交流プログラムを準備してくれていた。

はじめに、大聖堂の聖歌隊の青年たちと私たちで、教会の中庭でブルーシートを広げ「ピクニック交流」を行った。それを皮切りに、初夏の爽やかな気候



日露青年たちの交流

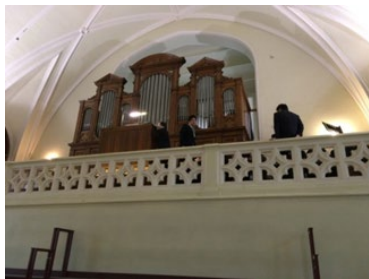
のなか、一緒にモスクワ川の遊覧船に乗って、美しい街並みを堪能したり、またワシリー寺院やクレムリンを一緒に見学したりと、実に楽しい青年交流の毎日であった。私は所用があって行けなかったが、どうやら日露の青年たちは一緒にポリショイ歌劇場でオペラ鑑賞もしたようだ。

こうした交流のなかで、演奏会の準備も着々と進めていった。本番の会場である大聖堂で練習をさせてくれたことは、とてもありがたかったのだが、驚いたのは、その芳醇な残響である。目白の関口教会（東京カテドラル）並みで、そのボワンボワンな響きに耳が慣れるまで1日を要した。ただ、こうした豊かな響きこそが、本来の教会音楽の空間であり、我が国の演奏環境の不十分さをあらためて実感した。



リハーサルの様子

演奏会で使用したオルガンは1898年にW・ザウアー（Sauer）社が作品755として制作したもので、2005年にオ



ザウアー・オルガン（1898）

ルガン建造家ラインハルト・ヒュフケン（Reinhard Hüfken）による修復が施されたもの。ロシア革命以前に製作されたドイツのオルガンが、モスクワに存在することを知り、革命前のロシアの香りを嗅いだような気がした。演奏会では、このオルガンが美しい音色で、演奏に彩りを添えてくれたことは言うまでもない。



オルガンの鍵盤

6月9日（日）の聖霊降臨日の主日礼拝で、私たちは賛助演奏の機会をいただき、今回の演奏曲であるオラトリオ《ヨブ》から、アカペラ合唱曲の2曲を歌わせていただいた。ひとつは第23曲「嗚呼過ぎにし年月の如く」で、これはエレーナさんから「とても綺麗な音楽。ロシア正教会の宗教合唱曲を思わせるわ」という感想を頂戴した。 聖霊降臨日の主日礼拝



なるほど、言われてみれば、ボルトニャンスキーの宗教合唱曲に雰囲気似ている。もうひとつは第8曲「エホバ与えエホバ取り給う」で、これは日本で最も有名な讚美歌のひとつである《まぶねのなかに》（安部正義・作曲）と同じ旋律のコラールである。日本の讚美歌の旋律が、モスクワで鳴り響いた貴重な機会となった。



礼拝後の集合写真

演奏会は6月12日（水）に行われ、私たちは無事に安部正義のオラトリオ《ヨブ》の「ロシア初演」をはたした。大聖堂には、多くの聴衆が集まってくれた。謎の言語による声楽曲をひたすら90分間も聴くのは、さぞかしモスクワの聴衆の方々も辛かろうと思い、歌詞のロシア語訳を掲載した冊子を用意したが、それもあつと言う間になくなってしまったという。このロシア語訳を準備するにあたって、日本正教会神父の水野宏先生に多大なるご協力を賜ったので、ここであらためて感謝しておきたい。

私たちが、最終曲のピアニッシモによる静かな「アーメン」の合唱を歌い終え、静寂のなか、会場がその余韻をかみしめた後に、大きな拍手が私たちを包んでくれた。メンバー全員で3階のオルガン席から1階まで降りて、聖堂の中央通路を歩いて祭壇の前まで進むときも、通路の左右からたくさんの拍手をいただいた。どうやらモスクワの聴衆は、日本最初のオラトリオ《ヨブ》の音楽を大いに楽しんでくれたようで、私は大きな安堵の気持ちを感じることができた。大聖堂のスタッフは、この演奏会に合わせて公演ポスターも準備してくれたが、これが東洋の神秘を感じる、なかなか素敵なデザインで、気に入った私は日本に持ち帰り、今は我が家に飾ってある。



終演時の集合写真

■平和交流の意義

このようにモスクワ演奏旅行は、思いがけず楽しい日露青年交流となった。今度はお返しにと、モスクワ・ルーテル大聖堂の若者たちを2020年5月に東京と熊本で迎える予定だったが、その年の初めに新型コロナ・ウィルスの世界的な蔓延が発生し、延期を余儀なくされた。その後も、大聖堂の音楽監督のマキシム・ポリー氏に「コロナ禍が収まったら、ぜひ日本に招待したい」と連絡を送り、先方も「ぜひ」と返事をくれたが、今度は戦争が始まってしまった。しかも、毎日のように報道を通して、ロシア軍の非人道的な戦闘ぶりが伝えられ、ウクライナ

現地の状況は地獄のようだという。あれほど、外国人である私たちを歓待してくれたモスクワの人びとの善意を思い浮かべると、現在、報じられているロシアの姿には、どうしても違和感を覚えてしまう。

2019年にモスクワを訪問したとき、さる事情通が次のような注意を促してくれた。曰く、ロシア人は基本的にお互いに助け合う人たちで、それは過酷な社会の中で助け合わなければ生きてこれなかった歴史が生んだ「国民性」だという。今でもロシア人は若者を含め、路上で施しを乞う貧民には、必ずお金を恵む。その一方で、ロシア人は「基本的に二重人格者」であり、これも過去の歴史と照らし合わせるとわかるが、急に「残酷な態度」に変わる側面があるから要注意だというのだ。

今、まさに私は、この事情通の言葉を思い知ったような気がする。もちろん、この言葉を信じたくない気持ちもまだ多分にあるが、コロナ禍と戦争で、私がわずかながらでも貢献したつもりでいた日露交流は、灰燼に帰した思いだ。それどころか、今後、はたして私が生きている間に、もう一度、モスクワの地に立つことができるようになるのか、それさえも疑わしい。わずか2~3年で、すべての状況が一変し、不条理さを感じるほかないが、このように人は、理不尽な思いをすると「なぜ、私が…?」「なぜ、こんなことが……?」「どうして……?」と、疑問符を並べてしまう。

これは、『ヨブ記』で、サタンの試みを受けたヨブも同じだ。正しい人であるヨブが、なぜこのような不幸に陥ったのかと。そして、周囲の人びとは、その原因を説明しようと、さまざまな答えを考えるが、どれも本当に納得のゆくものはない。そして神も、それに答えてくれない。そのなか、ヨブが第42章で出した結論は「私は塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改める」ということだった。「自分を退け」とは、人間の基準で考えることをやめる、ということ。そして「悔い改める」とは、「神の方を向く」ということにほかならない。

神の方を向きながら、現実から目をそらさず、ともに苦しみ、自分にできることを常に模索するしかないことをヨブは教えてくれている。模索は、あるかどうかもわからない答えを探すのだから、その過程は決して楽でもなければ、楽しいものでもない。しかしウクライナの戦火にしても、日露関係にしても、人びとに「楽しかった交流の日々を取り戻したい」という思いがあれば、思いがけず早くに、その未来は私たちに歩み寄ってくれると信じている。そして、私たちの青年交流が、その種のひとつになってくれればと祈っている。

かとう・たくみ（協力研究員・音楽学）

雑録

2022年3月19日（土）、当研究所が主催する2021年度最後の企画として3月研究会を開催した。1年間の活動の締めくくりとなるこの研究会も、近年の例に倣い全面オンラインでの実施となった。今回の研究会の報告者は、今年度の春に当研究所の客員研究員に着任された工藤万里江氏と村上志保氏である。

工藤氏の報告「フェミニスト神学とキア神学におけるマリア論」では、従来活発に議論されてきたとは言えないマリアの存在が、フェミニスト神学およびキア神学ではどのような視点から問題になるのかが論じられた。キア神学者であるアルトハウス＝リードの刺激的な議論を踏まえ、シンボルシステムの廃棄が容易でない状況では、より良いシンボルの解釈ではなく、現実の生からシンボルを語り直す試み（＝シンボルの「下品化」）により大きな可能性が見出せるとの工藤氏の結論は説得力があり、示唆に富むものであった。

村上氏の報告「現代中国プロテスタント教会をめぐるグローバル化の影響-海帰キリスト教徒の事例を中心に」では、中国外での生活経験をもち、帰国後も信仰を保持

した海帰教徒を事例として、グローバルなキリスト教共同体を形成する可能性と課題について論じられた。北京国際教会華語礼拝（IMS）のように海外華人と多数の海帰教徒を包含する国際的な教会は、現代中国における超国家的な教会像の構想を導く可能性を有している一方で、「宗教中国化」を掲げる習近平政権下においてそれがどう実現可能かという村上氏の現状分析には深く考えさせられるところがあった。

工藤氏、村上氏の研究報告には、それぞれコメントーター主導の質疑応答の時間を設け、3月研究会は濃密な学びの時間となった。先の見えないコロナ禍における緊急事態宣言やまん延防止等重点措置により、工藤氏と村上氏には年度内のほとんどの期間を在宅でご勤務いただいた。引き続き感染防止には万全の対策が要されるが、拝眉の折には、研究所の活動にご尽力くださったことに改めて感謝を申し上げたい。

3月研究会の終了後、引き続きオンラインにて、研究所全体での懇親会を開催した。私は今年度に主任に着任したこともあり、お名前はかねてより存じ上げながら、お顔を拝見するのは初めての方々も多かった。短い懇親の時間ではあったが、顔をあわせての交流という研究所の魅力が久しぶりに味わった気がした。今後もそのような機会が持てる可能性を逃さないようにしたい。

今年度末をもって、徐正敏所長の役職任期が満了となり、2022年度は久保田浩所員（国際学部）が新所長に就かれることになった。徐所長には6年間、重責を担ってくださったことに、心よりの感謝を申し上げたい。分からないことばかりの私を大きな心で導いてくださった。研究所の様々な改善案には今年度中に形にできなかったものもあり、久保田新所長にはご負担をおかけすることが心苦しく思う。2022年度も主任を務めることになった身として、微力ながら精一杯お支えしたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動 (2021年12月～2022年3月)

第7回賀川豊彦シンポジウム

「連携からはじまる新時代のコミュニティの再生」

開催日時：2022年2月9日(水) 18:00～20:30

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

※共催として開催。

パネリスト：

石田 正昭 (京都大学学術情報メディアセンター研究員、三重大学名誉教授、前龍谷大学教授)

中村 圭介 (法政大学大学院連帯社会インスティテュート教授)

青竹 豊 (一般社団法人 日本協同組合連携機構[JCA]常務理事)

南部 美智代 (労働者福祉中央協議会事務局長)

稲垣 久和 (東京基督教大学特別教授、本研究所協力研究員)

司会進行：伊丹 謙太郎 (法政大学大学院連帯社会インスティテュート教授)

主催：賀川豊彦シンポジウム事務局

キリスト教文化・芸術研究プロジェクト主催公開研究会

「音楽による神の愛の表現 第4回」

開催日時：2022年3月12日(土) 15:00-17:30

開催方法：Zoomを用いてオンラインにて開催

発表：

近松 博郎 (協力研究員)

「J. S. バッハ周辺の音楽マニフィカト——バッハ着任前のライブツィヒにおける作曲と上演の状況」

加藤 拓未 (協力研究員・司会兼任)

「ラインハルト・カイザーの《フーノルト受難曲》(1705)と《ブロッケス受難曲》(1712)——台本の比較分析(その2)」

キリスト教研究所 3月研究会

開催日時：2022年3月19日(土) 15:00-17:40

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発表①

「フェミニスト神学とクィア神学におけるマリア論」

発表者：工藤 万里江 (客員研究員)

コメント：植木 献 (所員)

発表②

「現代中国プロテスタントをめぐるグローバル化の影響
—海帰キリスト教徒の事例を中心に」

発表者：村上 志保 (客員研究員)

コメント：渡辺 祐子 (所員)

中華圏プロテスタント研究会・アジアキリスト教史研究
プロジェクト共催研究会

開催日時：2022年3月25日(金) 15:00-17:30

開催場所：Zoomを用いたオンライン開催

発表：

中津俊樹 (日本現代中国学会、アジア政経学会会員)

「中華人民共和国におけるカトリック教会」

新着図書

- ・『福音と世界』No. 12、新教出版、2021。
- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版、2022。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版、2022。
- ・『キリスト教年鑑 第64巻(2021年～2022年)』キリスト教年鑑編集委員会、キリスト新聞社、2021年。
- ・『Japanese Religions』Vol. 44 Nos. 1&2、NCC 宗教研究所、2021。
- ・『Reallexikon für Antike und Christentum, Bd. 30』Anton Hiersemann, 2021。
- ・『Ecclesiastes 5-12』Stuart Weeks 著、T&T Clark, 2022。
- ・『信友』(復刻版) 第1巻～第3巻・別冊、不二出版、2022。
- ・『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉾脈』神田健次 著、関西学院大学出版会、2015年。(神田健次先生ご寄贈)
- ・『クィア神学の挑戦 クィア、フェミニズム、キリスト教』工藤万里江著、新教出版社、2022。(工藤万里江先生ご寄贈)
- ・『文語訳聖書を読む 名句と用例』鈴木範久著、筑摩書房、2019年。(鈴木範久先生ご寄贈)

2022 年度メンバー

所長 久保田 浩

主任 田中 祐介

所員

教養教育センター：植木 献、篠崎 美生子、嶋田 彩司、徐 正敏、中野 綾子、永野 茂洋、吉岡 拓、渡辺 祐子

文学部：久山 道彦、齊藤 栄一

経済学部：手塚 奈々子

社会学部：坂口 緑、佐藤 正晴、深谷 美枝

法学部：鍛冶 智也

国際学部：、森 あおい

(以上 18 名)

名誉所員

鶴殿 博喜、遠藤 興一、大西 晴樹、小田島 太郎、加山 久夫、佐藤 寧、司馬 純詩、柴田 有、辻 泰一郎、

中山 弘正、橋本 茂、播本 秀史、真崎 隆治、丸山 直起、水落 健治、森井 眞、山崎 美貴子

(以上 17 名)

客員研究員

工藤 万里江、村上 志保

(以上 2 名)

協力研究員

Andrew H. Ion、李 相勲、李 省展、李 惠源、稲垣 久和、今村 正夫、宇井 志緒利、岡田 仁、岡田 勇督、

岡部 一興、岡村 淑美、柿本 真代、勝俣 誠、加藤 拓末、金丸 裕一、木村 一、清澤 達夫、國津 信一、

倉田 夏樹、小林 孝吉、齋藤 元子、坂井 悠佳、佐藤 飛文、朱 海燕、徐 亦猛、鈴木 進、高井 啓介、

高井 ハー 由紀、高橋 一、竹田 文彦、崔 善愛、近松 博郎、辻 直人、土肥 歩、豊川 慎、中井 純子、

中西 恭子、西元 康雅、長谷川 美保、黄イェレム、裴 貴得、牧 律、松谷 曄介、丸山 義王、三野 和恵、

宮坂 弥代生、村上 文昭、八木 隆之、横山 正美、吉馴 明子

(以上 50 名)

教学補佐

高橋 英里

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第87号

2022年4月18日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩